

●ウイスキー・ラベル物語-16

植民地で再生されたアメリカン・ウイスキー(6)
—ジャック・ダニエルはテネシー・ウイスキー—



か わい だし
河 合 忠
Tadashi KAWAI



ジャック・ダニエルが生まれたテネシー州

テネシー州はケンタッキー州の南に位置し、四方を最も多い8つの州と接し、地域性も多彩である。すなわち、アパラチア山脈の東部山岳地帯、商工業の盛んな中部台地、そしてミシシッピー川沿いの西部農業地帯の大きく3つの地域に分かれており(図1)、テネシー州のシールや州旗には3つの星で象徴されている(図2)。1521年にスペイン人のソト(Hernando de Soto)が初めて足跡を残し、1670年頃にはフランス人、そして1680年頃にはイギリス人が足を踏み入れ、1757年に入植が始まったという。1796年6月1日に第16番目の州として合衆国に加盟したが、南北戦争が近づいていた1861年、合衆国から脱退した最後の州として南軍に加わった。テネシーという州名の元は、チェロキー族の集

落の名前に由来するテネシー川と言われている。しかし、テネシー州になぜ多くのアイルランド系移民が移住したのかの手がかりは得られていない。

現在、人口約579万人(2002年)、米国第34番目の面積(約10万km²)をもっている。州都はナッシュビル(Nashville)で、独立戦争時の総司令官フランシス・ナッシュ(Francis Nash)に由来し、フランス語の村(-ville)と合成した名称である。州のニックネームは“The Volunteer State”と

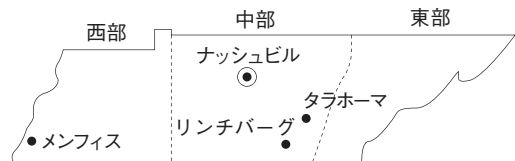


図1 テネシー州の略図

山岳地帯の東部、商工業地帯の中部、農業地帯の西部の3つにほぼ分割され、ジャック・ダニエル蒸留所は中部地帯の南部、リンチバーグにある。なお、タラホーマには、もう1つのテネシー・ウイスキーであるジョージ・ディッケルの蒸留所がある。



図2 テネシー州のシール、旗および25セント硬貨

左は州のシールで農業と商業を表すデザインを中央に、XVIは16番目の州であることを示している。中央の州旗は、全体を赤の背景にして中央の青い円形からなり、3つの地域を3つの白い星で表し、それを白い輪でしっかりと囲み団結を意味している。右の25セント硬貨は、2002年に発行されたもので、中央には musical heritage と印され、3種類の楽器と3つの星を配している。すなわち、ギターはカントリー・ミュージックの発祥地ナッシュビルのある中部、中央上のトランペットはメンフィスを中心とする西部のブルース、バイオリンは東部のアパラチア音楽を代表している。有名なエルヴィス・プレスリーはメンフィスを中心に活躍した。

国際臨床病理センター (ICPセンター) 所長・自治医科大学名誉教授
☎ 154-0003 東京都世田谷区野沢 2-7-12 野沢ハイム 202号

International Clinical Pathology Center (ICP Center)
(Nozawa Heim, Suite 202, 2-7-12, Nozawa, Setagaya-ku, Tokyo)

いわれ、英国軍との1812年の戦争で、当時のブラウント知事（Governor Blount）の呼びかけに応じて多数のテネシー州民がボランティアとして参戦し、勝利したことに由来するという。

1861～1865年の南北戦争の時は、ケンタッキー州は北軍、テネシー州は南軍に属し、互いに激しい戦いに巻き込まれたことは以前に述べたとおりである。南軍187,000人と北軍51,000人が集結し、テネシー州は文字どおり2分され、最激戦地区となった。北軍に属したケンタッキー州のバーボンがあまりにも有名であった故か、南軍が敗北して北軍によるアメリカ合衆国政府が誕生した故か、米国の酒税法ではテネシー州で造られるウイスキーはその原料成分からバーボンに包含されている。皮肉にも、南北戦争後の北米合衆国として初めて政府が公認したウイスキー蒸留所が、テネシー州の中部台地、ムーア郡のリンチバーグ（Lynchburg, Moore County）にあるジャック・ダニエル蒸留所（Jack Daniel

Distillery）で、その申請書に書かれていたのが“whiskey”であり、それがそのまま酒税法に採用され、ほとんどのアメリカン・ウイスキーがそのように綴られるようになったと考えられる。

それでは、なぜジャックは“whiskey”と綴ったのであろうか？ ダニエル家やジャックのウイスキー造りの師匠であるコール家がアイルランド系移民であるか否かの記述は見つからないし（ほとんどはScots-Irishの表現が使われている）、ジャック・ダニエル蒸留所への問い合わせについても確たる返信は得られなかった（写真1）。少なくとも故国でIrish whiskeyを愛飲していた人たちが、ジャックの生まれたリンカーン郡に多く入植していたことは間違いのないのではないだろうか。だからこそ、ジャックは無意識に“JACK DANIEL WHISKEY LYNCHBURG, TENN.”として登録したのであろう（写真2）。



ジャックの生い立ちとウイスキーとの出会い

ジャック・ダニエル・ウイスキー（Jack Daniel's whiskey、以後ジャック・ダニエルと略称する）は、北米合衆国の登録第1号蒸留所で造られ、その独特の製法と香味から、現在100カ国以上に輸出され、1998年、遂にその販売数量が562万ケースとなり、ジム・ビームの販売量をを超えて、第1位と

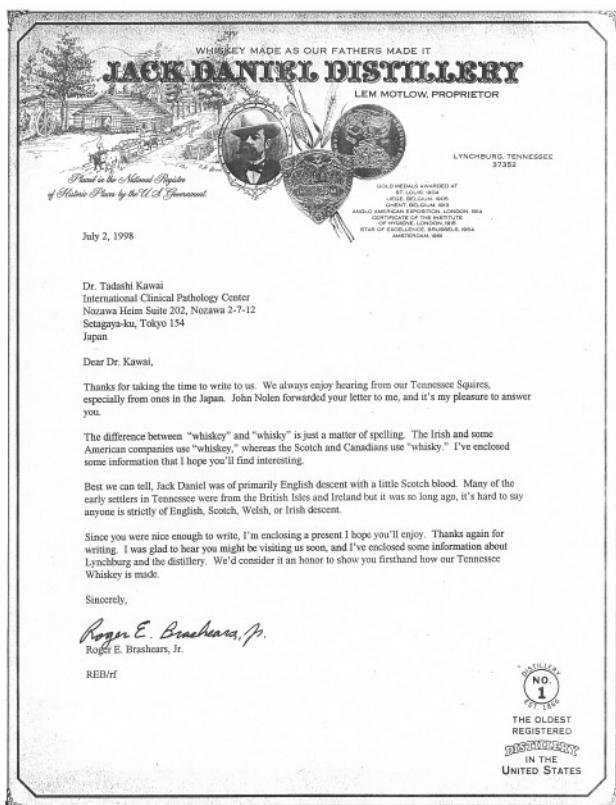
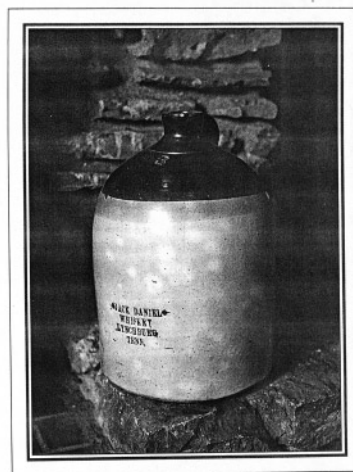


写真1 ジャック・ダニエル蒸留所からの返信

ジャックの家系のルーツはスコットランドかアイルランドかの質問に対する回答文書であって、英国であることは明らかだが、遠い昔のことは明らかでないと思われる。レターヘッドが大変興味深いので、そのまま縮小して掲載した。左上隅にはジャックがリンチバーグに作った最初の蒸留所風景、中央上にはコーンと大麦を背景にしてジャックの写真と2つの金賞を誇らしげに配している。右下隅には、公認登録第1号であることを示している。



This stoneware jug stenciled "Jack Daniel's Whiskey Lynchburg, Tenn." dates between 1865 and 1870. It is 15" high, glazed dark brown and sand with an overlapping narrow band of light brown around the shoulder. The maker's imprint indicates it is three-gallon capacity.

写真2 ジャックが創業時使っていた酒瓶

1805～1870年頃まで使われていた酒瓶で、JACK DANIEL'S WHISKEY LYNCHBURG TENN.と書かれている。当時のウイスキーは、蒸留後2,3日で陶器の瓶に詰められて、1ガロン（約3.8l）を約1ドルで販売されていたという。

なった。ウイスキー製造でここまで成功するには、創立者のジャスパー・ダニエル (Jasper Newton Daniel), 愛称 Jack (以後、ジャックと略称する) の数奇な運命と“リンカーン郡方式”にこだわった頑固一徹さがあったのである。

ジャックは1850年(1846年との記載もある)9月、ダニエル家(Calaway and Lucinda Daniel)の10番目の子として誕生したが、5カ月後に母は他界し、その後継母との関係も良くなく6歳で家出をし、近所に住む叔父のワゴナー家(Felix Waggoner)に住み込んだ。1年後、7歳の時にリンカーン郡に住むコール家(Dan and Mary Jane Call)に雇われた。ダンには宗教心にあつく、弁舌もさわやかで、近所のルーテル教会で牧師(正式な聖職者ではなかった)を務め、妻のメリーは雑貨店を営んでいた。そこで、ジャックは真面目に働き、算術、読書、などを幅広くメリーから教育を受け、ほとんど雑貨店を任せられるまでになった。当時、多くの移民家族では、規模の大小は別として、蒸留酒造りを行っており、課税など一切の制約はなかったようで、ダンの雑貨店でも蒸留酒の製造を行って販売をしていた。コール家の黒人奴隷アンクル・グリーン(Uncle Nearest Green)と彼の2人の子ども(George and Eli)が蒸留を手伝っていた。3人の黒人父子とともに8歳のジャックもダンから独特の蒸留酒造りを習得した。後になって、アンクル・グリーン父子はジャックによって奴隷から解放され、終生ジャック・ダニエル蒸留所を支えた。

南北戦争の危機が近づいていたころ、ルーテル派の牧師として熱心に宗教活動していたダンにとって、また敬虔なルーテル派キリスト教徒であったメリーが蒸留所を経営し、ウイスキーを販売することに対する周囲の厳しい目が向けられ、遂にダンは決意して彼の蒸留所をジャックに売り渡した。時に、ジャック13歳であったが、ウイスキー蒸留、販売という新しいビジネスに挑戦することとなった。ダンの雑貨店でのウイスキー販売は中止され、やむなくジャックはそれまでの貯金を叩いて運搬車を購入し、売り歩くことになり、遠くアラバマ州まで出かけて行ったという。



伝統の「リンカーン郡方式」にこだわったジャック

優れた蒸留酒造りに不可欠なのは“清らかで美味しい水”である。幸運にも、叔父から相続されたコール家の土地を流れるルーズ川(Louse Creek)は、石灰岩礁から湧き出る水の小川であり、蒸留所は雑貨店からほんの1.5kmも離れていなかった。コール家のあったリンカーン郡(Lincoln County)には、当時、約14基の蒸留釜があったと伝えられているが、すべての蒸留所で、ダン・コールが発案したとされる「リンカーン郡方式」(“Lincoln County Way”)を採用していたという。すなわち、一切の添加物を使用せず、自然の発酵によるサワー・マッシュ(sour mash)方式を採用し(前述)、原酒をサトウカエデから作った木炭を詰めた3mの濾過槽をゆっくり一滴一滴、約10日間もの時間をかけて濾過する(charcoal mellowing)、大変手間のかかる方式である。そのため、コール家のウイスキーはまるやかな香味で評判を得ていたという。しかし、あまりにも手間が掛かりすぎることから、他の蒸留所ではより短時間の方式で、利益をあげるように簡略化していったが、コール家は頑なにリンカーン方式を続け、それをジャックが真面目に踏襲し、さらにジャックを継いだ甥のレム・モトロウ(Lem Motlow)を経て、今日でもその方式を継承している。もちろん、現在は米国の酒税法に従って、内側を火炎で焦がした新しいホワイト・オーク樽で熟成しており、木炭槽での濾過を行っていることで、独特のまるやかさを維持しているのである。



ジャックの努力とユニークなアイデアで発展

13歳で蒸留所を経営するようになったジャックは、成人しても5フィート2インチ(約150cm)の小柄な体格で、黒人父子と2、3人の手伝いを雇い、精力的に行商に励み、徐々に販売を増やしていった。やがて、コール家から引き継いだ蒸留所を引き払い、石灰岩の大きな洞窟と鉄分を全く含まない湧き水の豊富なリンチバーグに蒸留所を移し、本格的なウイスキー生産を始めた。もう1つジャックにとって幸運なことに、南北戦争の始まった1861年、彼は15歳の未成年であったことから徴兵を免

れ、また激戦地という地の利を得て、南軍と北軍の両方に大量のジャック・ダニエルを販売し、大きな利益を得ることになった。南北戦争の終結後は政府が酒税をかけると予想していたジャックは、戦後間もなく、1866年、いち早く新政府に蒸留所の登録申請し、ジャック・ダニエル蒸留所は登録第1号(US No.1)となった。

ウイスキー生産者として名が知られるようになり、業績も順調に伸びていた21歳の誕生日を迎えるに当たり、突然市街に買い物に出かけたジャックは「膝までの黒い長いフロックコートの正装で、つばの広い農園管理人用の帽子(broad-brimmed planter's hat)」の姿で戻り、終生その服装で過ごした(写真3)。ウイスキー造りと同じように、「いったん彼の好みに合って決めたことは、決して変えなかった」という彼の性格を髣髴とさせるエピソードでもある。

1904年、ミズリー州、セントルイスで開催された世界貿易博覧会に初めて“Old No.7 Tennessee sipping whiskey”を展示し、世界から展示された20種類の中で唯一「金賞」を獲得し、いよいよ世界にJack Daniel's Old No.7 Tennessee Whiskeyの名を馳せることとなった。その後も1905年ベルギーのリージュ、1913年ベルギーのアントワープ、1914年イギリスのロンドン、1954年ベルギーのブラッセル、そして1981年オランダのアムステルダムなど数々の博覧会で金賞を受賞している。彼がなぜ“Old No.7”のブランド名を考え出したのかは謎とされている。手間のかかるリンカーン方式にこだわ

り続け、他の同業者が次々と安易な生産方法に切り替える中で、伝統的な方式に誇りをこめたのであろうか、生産を始めた初期の頃から“Old Time Distillery”、“Old Time Sour Mash”、“Old No.7”など“Old”の字を好んで用いていた。そして、1887年からOld No.7をブランド名として使用し始めた。

1905年のある日、ジャックは早朝出勤し、彼の金庫の鍵を開けようとしたが、なぜかパスワードならぬ暗証番号を合わせることができず、怒りのあまり金庫を激しく蹴り上げた。そのときに傷めた足の指から感染し、壊疽のため足を切断するが、それが原因で1911年10月9日、敗血症のため他界した。彼は、一生独身を通し、子供もいなかったことから、多くの親族を雇用していたが、甥のレム・モトロウがジャック・ダニエル蒸留所の経営を引き継ぎ、ジャックに劣らずその発展に努力した。しかし、相続税対策のために、モトロウ家は1956年ブラウン・フォーマン社に売却したが、蒸留所の従業員をそのまま雇い続けて会社一丸となって伝統を継承したばかりでなく、ジャックがそうであったように、わずか約400人の住むリンチバーグ村全体の経済と生活を一世紀以上もの間、変わることなく支えてきている。



ジャック・ダニエルはバーボンではない

ジャックとそして彼のウイスキー造りを継承したレム・モトロウは、ジャックの死後、新しい時代のニーズに応じて熟成期間を延ばした製品を造り、

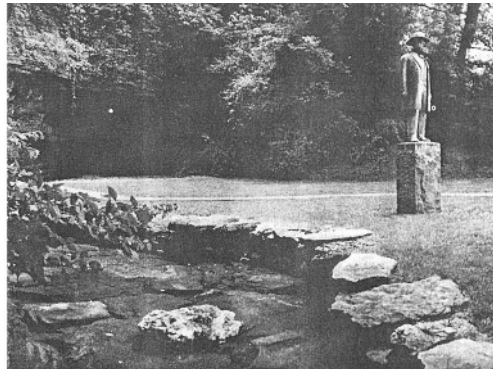
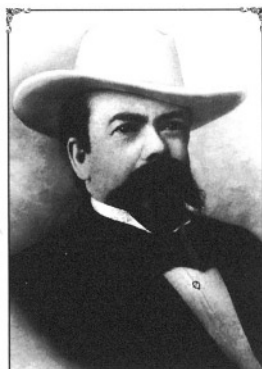


写真3 ジャックのポートレートと洞窟の入口に建てられているジャックの全身像

左はジャックのポートレート、右は彼がリンチバーグ谷に発見した30mも深い石灰岩洞窟の入口に建てられてある外出着の全身像。ジャックは、21歳から生涯同じ正装で過ごした。この洞窟からは鉄分や他のミネラルを含まない湧き水が、今でも豊富に流れ出ている。

1912年、伝統的な緑のラベルから現在の黒ラベルに変え、今でも四角のガラス瓶に黒いラベルを貼った独特の姿が続いている（写真4）。時に応じていろいろな記念のボトルを販売したことはあっても、一世紀もの間ただひたすらに「No.7黒ラベル」にこだわり続けている。しかし、近年は時代の流れとともにプレミアム・ウイスキーや新しいブランド品を販売している。

ジャック・ダニエルも他の蒸留所と同様に、禁酒運動と禁酒法に悩まされ続けたのは当然である。前述したように、ジャックが生まれる以前から盛り上がり始めた禁酒運動はテネシー州にも及んでいたし、1909年には州法で禁酒を定めたため、他の州での販売を余儀なくされていた。そして、1920～1933年の禁酒法時代にはジャック・ダニエル蒸留所も閉鎖し、モトロウ家は他のビジネスに鞍替えせざるを得なかった。禁酒法時代が終わると再び伝統のウイスキー造りを始めて、今日の成功に導いたのはレム・モトロウであった。しかし、リンチバーグは、今でも、公式には“禁酒地域”であり、自慢のジャック・ダニエルを購入できるのは蒸留所内だけであるというのも皮肉な話である。

禁酒運動への抵抗に加えて、独特のリンカーン郡方式で造られた独特のジャック・ダニエルをバーボンとは区別して、「テネシー・ウイスキーが公認されること」を念願し、あらゆる機会に政府や政治家に訴え続けた。その努力が実り、ジャックの死後、



写真4 ジャック・ダニエルの3つのブランド商品

左は、1912年から変わらないデザインの四角瓶と黒ラベルのJACK DANIEL'S BLACK Old No.7 BRANDである。中央は、近年追加されたJACK DANIEL'S GENTLEMAN JACKで、熟成樽に詰める前に原酒を木炭層で濾過するだけでなく、熟成終了後に再度木炭層を濾過することにより、さらにまろやかさを増している。右は、1993年に発売された日本限定品のJACK DANIEL'S MASTER DISTILLERで、厳選した原酒を使う貴重な逸品とされている。

1944年、連邦政府は公文書を送り、その中に“Your charcoal mellowing process produces characteristics unknown to bourbons, ryes, and other whiskeys and thus Jack Daniel is officially designated as a Tennessee Whiskey.”と記し公式にテネシー・ウイスキーと呼ぶことを承認した。ジャック・ダニエルのラベルのどこを見ても、bourbonの記載はなく、堂々とTennessee whiskeyと印刷されている。しかし、米国酒税法では、主として原料の穀物の組成から、いまだにバーボンに分類されていることは前述したとおりである。

テネシー・ウイスキーを名乗るもう1つのジョージ・ディッケル社がテネシー州のタラホーマ(Tullahoma)にある。チャコール濾過の前に原酒を冷却する独特の方式を採用し、長期熟成で少量生産のプレミアム商品であるが、なぜかTennessee Whiskyと印されている（本シリーズNo.11, 写真2を参照）。経営者のジョージ・ディッケル(George Dickel)がスコットランド系なのか、ジャック・ダニエルと区別するためなのか、その真意は明確ではない。



隠れたジャック・ダニエル愛好家クラブ, TSA

貧しい幼年時代を過ごしたジャックは、コール家から譲り受けた蒸留所とリンカーン方式のウイスキー造りで財を成し、弱冠13歳にしてリンチバーグに広大な森の土地（現在の所有地は220エーカー：約27万坪）を得て定着し、生涯を過ごした。それだけにリンチバーグの谷(Lynchburg hollow)を、そしてムーア郡を愛し、多額の税金を納める他に、さまざまな社会還元を行ってきた。一例として、1892年にはリンチバーグ村バンドを創設し、やがて“Jack Daniel's Original Silver Cornet Band”として有名となり、ラジオ・テレビのない時代に地域住民に大きな憩いの機会を与えた。その他、さまざまな形で地域の振興に努め、その努力はモトロウ家、そしてブラウン・フォーマン社にも受け継がれ、住民から尊敬されていたからこそ、禁酒運動にも、また禁酒法時代をも乗り越えて、いまだにリンチバーグ全住民の支持が得られ、今日売り上げ第1位を獲得したと考えられる。

ジャック・ダニエル蒸留所が運営するユニークな

愛好家クラブ, The Tennessee Squire Association (TSA) (図3), のあることをご存じであろうか。その組織は全く不明で、会員相互の交流は全くなく、世界中に何人がメンバーであり、日本には何人が、誰がメンバーであるかも一切公表されていない。そのメンバー組織を、「ジャック・ダニエルを愛飲する」という以外のいかなる目的にも利用されないための配慮である。筆者は、日本在住のK氏の推薦を受けて1983年7月13日に会員となり、その後筆者の推薦によりO氏が会員となっているの



P. O. Box 8026
Moore County
Lynchburg (POP.361) Tenn. 37352

図3 ジャック・ダニエル愛飲家クラブTSAのロゴ

TSAはTennessee Squire Associationの略号で、中央には騎馬に乗った治安官が印されている。事務所はジャック・ダニエル蒸留所内に置かれている。

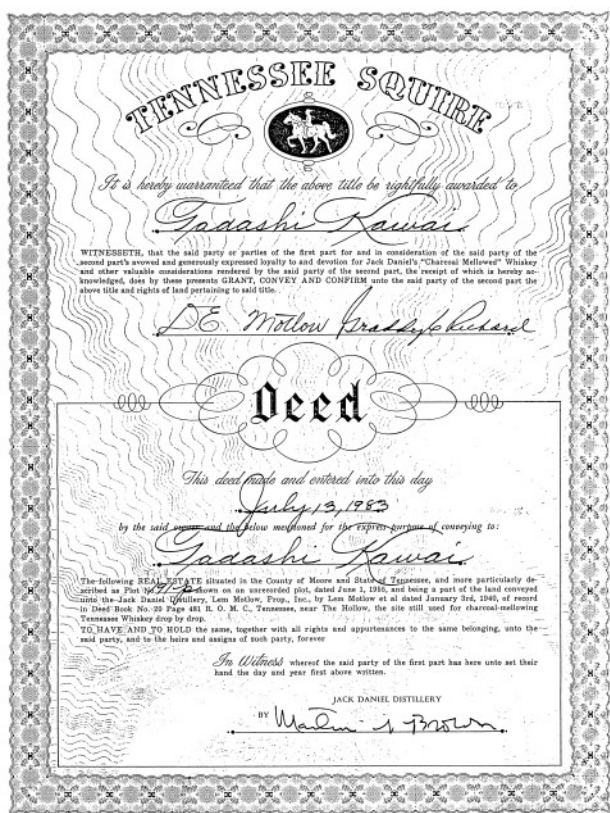


写真5 TSAメンバーの任命書と土地の権利書

上段は、TENNESSEE SQUIRE (テネシー治安官) の任命書で筆者の姓名が書き込まれている。下段の枠内は、1983年7月13日付でテネシー州ムーア郡の土地区画Plot No. 191 pをTadashi Kawaiに譲渡する旨を記載した土地権利書である。

で、少なくとも3人は日本人会員として登録されているはずである。

“Squire”とは、もともと「(昔の英国の)大地主」の意味であるが、米国では「治安官」の意味に使われている。すなわち、Tennessee Squireとは「テネシー治安官」を意味し、ジャック・ダニエル蒸留所によってTSAの会員に選出されると「テネシー治安官」の肩書きが許される。もちろん会員資格は単純で、実績のある会員から推薦され、ジャック・ダニエルを愛飲することの意思表示すればよい。その代価として、ジャック・ダニエル蒸留所が1940年から所有している広大なムーア郡リンチバーグの土地の“one plot” (一区画、実際に何坪あるかは不明)の権利が譲渡される。すなわち、その区画の権利を所有するが、固定資産税はジャック・ダニエル蒸留所がムーア郡に支払ってくれる。実際に、所有権が譲渡された事実がムーア郡役所から筆者宛に通知があった。その任命書と権利書の縮小コピーが写真5であり、筆者の土地区画の航空写真が写真6である。十数年前に、その付近一帯が洪水で水浸しになったときも、草木の薙ぎ倒された様子の写真を付してムーア郡役所から通知があった。一時期、郡役所の手違いによって、筆者宛に固定資産税の滞納通知が届きびっくり仰天したが、もちろんその誤りが訂正され二度と同様の通知は届いていない。ただ、毎年TSA事務所からクリスマス・カードとジャック・ダニエル蒸留所のカレンダーが届けられる。残念なことに、筆者自身の目でリンチバーグの自分の土地区画を確認する機会がなかったが、いつかジャック・ダニエル蒸留所の見学訪問と併せて、「自分のアメリカの土地」を是非一度は確かめたい



写真6 ムーア郡土地区画Plot No. 191p周辺の航空写真

灌木と森からなることは分かるが、何坪あるかは不明である。近いうちに、自分自身の目でミミズが豊富に棲む土地、牛が草を食べる土地、“虎のように大きな”野犬が睨みをきかせて横たわる大木が立つ土地を確認しようと思う。

と願っている。

上述のように、土地区画の所有者の名前と住所がムーア郡事務所に登録されてあるので、誰でも登記簿を閲覧することができる。そのため、過去21年の間にリンチバーグ村民の数名からさまざまな内容の手紙が届いている。例えば、釣道具店主から「ミミズを無料でとらせてほしい、その代わりリンチバーグに来た時は案内する」、見知らぬ“口うるさい”婦人から「大きな木の枝に横たわる虎のよう

に大きな野犬が目障りなので、何とかしてほしい」、カウボーイから「純系の黒牛から鼻先が白い子牛が生まれたのは、貴殿の土地に放牧しているオス牛が元らしいが、どうしてくれる」、ある婦人から「私の祖母の古い日記に“Kawai”らしい名前が書かれているが、貴殿の親戚がテネシー州に移住した事実はないか」等々、それぞれが短い随筆の種になりそうな逸話ばかりであるが、今回、誌面の都合で詳しく紹介できないのが残念である。